

ポストコロナの子供たちと都情研

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

墨田区立業平小学校長 伊藤 康次



令和5年度、東京都公立学校情緒障害教育研究会 会長を務めさせて頂いて下さいます、墨田区立業平小学校長 伊藤 康次 でございます。会長職3期目となります。どうぞよろしく願います。

◆ポストコロナと子供たち

さて、3年余にわたる新型コロナウイルスウィルス感染症拡大防止のために、学校教育活動は、様々な制限がなされてきました。ポストコロナを迎え、単に以前の学校教育活動に戻すのではなく、コロナ禍の中で積み重ねてきた教育実績も合わせて「教育の本質」を追究し、「再構築」することが求められています。社会は急速にコロナ前を取り戻すかのような勢いで変化していません。しかし、このような変化にうまく適応できず、戸惑いや不安を隠しきれない子供たちがいるのも実情でしょう。

コロナ後の学校の様子を見ると、人と関わる活動が増える一方で、うまく他者との関係性が築けない子、学校行事では、「みんなとそろえて」という教師の声掛けに戸惑っている子、通常の時間割が変更されて特別行事時間割となり、一日の学校生活への見通しがもてない不安がある子：

ポストコロナを生きる子供たちの「一人一人の事情」にどれだけ私たちが気付くことができるのか、大きな課題であると認識しています。

◆「つなぐ」ことを大切に

特別支援教室は、平成28年度から順次導入が始まり、平成30年度に都内公立小学校、令和3年度に中学校において全校配置が完了しました。

この間、モデル実施を含め、巡回指導の在り方について研究と実践を積み重ね、さらに拠点校においては、特別支援教室運営についても協

議、検討を重ねながら構築してきました。

今後、各地区、各校において特別支援教室制度の立ち上げ、具現化に努めてこられた先生方の多くが異動を迎えます。

私自身も特別支援教室拠点校の校長として、モデル実施の段階から特別支援教室の運営に携わってきました。その時、自分自身の中で大切にしてきたことは、情緒障害等通級指導学級（以下、通級指導）として積み上げてきた実績、指導の財産を継承しつつ、どのように新たな制度設計に生かしていくかということでした。通級指導に適した教室環境、設備、教材教具をどのように特別支援教室の運営に反映していくか、いくつも大きな課題がありました。

特別支援教室導入に関わった先生方が多く異動していく時期を迎え、改めて、各地区、各校で培ってきた様々な教育資産をいかに継承、発展させていくか、本制度は、新たな段階を迎えたと感じております。

◆新たな課題への対応

各地区で自閉症・情緒障害特別支援学級が新設、拡充しています。まだ設置のない自治体でも、設置に向けて行政の中で議論、検討がなされているかもしれません。

本会においても、これまで夏季休業中に実施していた「中学校課題研修会」の中で自閉症・情緒障害特別

支援学級における実践報告と研究協議を実施してきました。

しかし、そもそも、どのような児童・生徒を対象にして支援していくのか、教育課程の編成や学習環境の在り方、通常の学級との交流及び共同学習の実施の仕方、人的配置や教材教具の工夫など課題は山積していると思っております。

今年度は、名称を「課題研修会」とし、小・中学校の校種を超えて、自閉症・情緒障害特別支援学級の教育について実践的研究を行いたいと思っております。

◆コロナ後の都情研

本会では、今年度は、本部主催の研究會、ブロックにおける研修会を一層充実させていくとともに、これまで各拠点校で進めてきた学級運営や優れた実践をとりまとめ、広く全都に発信していくとともに、各地区で中心となつて活躍、ご尽力いただいている先生方と特別支援教室の指導に関わる先生方とのネットワークをより強固なものにしていきたいと考えています。

各ブロックの副会長の校長先生、担当の校長先生、企画運営本部、ブロック各係の先生方のお力添えの程、よろしく願います。そして、特別支援教室に関わる全ての先生方の熱い情熱をいただきながら、コロナ後の都情研の第一歩を力強く踏み出していきたくと思っています。

令和五年度 都情研定期総会 記念講演(抄録)

「特別支援教室の通級指導を愉しむ

～情緒障害等指導学級担任として学んだこと～

元新宿区教育委員会特別支援教育相談係

長谷川 安佐子 先生

特別支援教室の指導について実際のご経験を踏まえ、分かりやすくお話していただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。

(広報担当)

一 はじめに

私自身は特別支援教室の経験はなく、情緒障害学級と通級指導学級の担任として勤務していました。その経験からお話いたします。

情緒障害学級で勤めていた頃はASDの子供が多く、ASDは情緒障害だと言われていました。お母さんの育て方が悪い、冷たい感じの育て方をしているから、こういう子になると信じられていた時代でした。その子自体には問題がないけれど、育て方によってこうなるという考

え方でした。

特別支援教室の指導内容は自立活動ですが、特に必要があるときは障害の状態に応じて各教科の内容を取り扱いながら行うことができるということになっています。「各教科の内容を取り扱いながら」とはその子供の興味があるものを使いながら、教科で必要なものをうまく入れていく。こうすれば覚えられるというのを見付けて指導していくということでした。「読む、書く」は教科の基礎になるので、本人の興味があるものを使いながらできるとよいです。一回読むとすごく理解が深まる子供もいます。そういう子は、通常の学級でその単元に入る前に一回読んで聞かせると、内容が頭に残って、学級で学習するときに抵抗感が少なくなりやすい。それは、予習して示しておくという意味で、効果的な子もいます。教科に関連して、効果が高いものはやっても構いません。通常の学級でできないような指導、その子用の教科との関連を考えるとということ。教科内容の復

習や練習は求められていることではありません。

健康の保持とか身体の動きなどはあまり関係ないと考えられる方もいるかもしれせん。しかし、きちんと生活して、寝る時間を確保することが難しい子もいます。眠る時間を意識しないと、朝起きてからうまく動かせません。自分の健康のためには睡眠が大事で、何時ごろ寝なくてはいけないということが分かる、どこか具合が悪いときに自分の身体がどうかということを感じ取り、それを人に説明できることはとても大事です。

また、漢字を書くことが苦手で見えられない子供に対して、少しでも漢字を書く抵抗をなくすために、書き順が絵描き歌になっている辞典のようなものを活用したことがあります。すると、直して消すことが少なくなり、短い時間で終わるようになった子供もいます。それで本人は抵抗感がかなりとれたようです。非常にダジャレが大好きな子供がいて、一つ変なダジャレの使い方の熟語を書いて私に見せてくれたので、「面白いね。もう一つ考えて」と言うと、ものすごく面白い間違った使い方をしてくれてくれたことでもあります。とてもユニークで面白い間違え方だったので、私は時々ダジャレをいっぱい作ってもらいました。「これ五文字練習しようよ」と言っても、嫌がつて絶対やらなかった子が五回間違った使い方その

字を使って書くのです。「ちよつと間違った使い方ばかりだと困るから、一つぐらい正しい使い方のもを作つて」と言ったら、指示に応じて正しい使い方を書いて持つてきてくれたこともあります。通常の学級では「間違つた使い方をやってみて」ということはしれないと思います。通級でその子用にやっているプログラムだからできる。そういうこともその子用の教科との関連ということだと考えられます。

私は最初の頃、身体の動きが大事な視点であるということとはよく分からなかったのですが、「自分の体のコントロールができない子に感情のコントロールなんてできないでしよ？やはりまず体のコントロールを教えて」とある先生に言われたのです。確かに身体の動きがすごく悪い子は、やはり感情のコントロールも苦手な子が多いです。自分で自分の身体をコントロールする動きが分かることは、特に、小学校の低学年の子供で、感情のコントロールが難しい子には、非常に有効な指導です。

二 子供を理解するとは

今まで通級では小集団と個別指導の両方をやっていたことが多かったのですが、今は小集団指導がやりにくくなっているという気がします。個別の中で先生と子供が交代でやるとしても、やはり大人がやるのと子供が交代でやるのとはずい

ぶん条件が違います。個別指導だけしている場合でも、同じ曜日に通って来ている同じ時間帯の子供とうまく合わせて、終わり五十分は二人でゲームをするとか、先生が入って四人でするとか、小集団活動ができる効果があると思います。大人と一対一のときはうまくいっても子供が一人入ると難しい子供もいると思うので、子供と一緒に調整してやる経験もすごく大事です。

子供を理解するためには、本人の特性プラス周囲からの声かけや育ち方などがすごく影響してきます。特性をもった子供たちは、通常の学級では怒られる・叱られるということが多いので、認められたり、称賛されたりすることが非常に少ないと思います。だから、特別支援教室に通って来た時にその子なりに認められたり、本人の言うことをじっくり聞いてもらったりすることで、子供が変わってきます。ある特別支援教室で、前の一週間にあった通常の学級の行動の振り返りというのをやっている先生がいました。特別支援教室では、その子を認めてその子を伸ばす教室なので、通常の学級にはめる所ではありません。本人がまずかったと思つて話す内容なら、担任に相当叱られたり、注意されたら、話をされたりしているはずですが、それをまた振り返って、もう一度するところ、もう一回、その子に突きつけるということになります。その

ようなことは、この教室でやることではないと私は思います。本人ができないことがあつて、苦勞している子供が来る教室です。どのようにしたらできやすいか、本人が一人できるやり方を見付けてあげたり、こういうやり方だったら覚えられないね、すごいね、できたねという成功経験をさせたりして、ほんわかムードにして通常の学級に戻すということだと思つています。こういう方法ならできるといふことを、通常の先生に伝えると、ヒントになり、通常の学級で使えることもあるかもしれませぬ。

三 一人一人に合わせて

記憶力に課題があつて、順番に物事を思い出せない子供がいます。この場合、そのことをよく理解して接してください。喧嘩したことの報告を聞いても、忘れている子供もいます。怒られるのが嫌で逃げていたのではなく、整つた記憶が残っていない、あるいは印象が薄くて残っていない、記憶が残りにくい子供がいるのです。前のことを根掘り葉掘り聞いても思い出せません。記憶させたいことがあつたらメモしておく、それを確認して目でも見て分かるようにしておくということが大事です。通常の学級で担任をしていると、言葉で言つてみんなが分かるのが基本なので、全体に言つて分からないはずはないという思いをもつてしまふのです。聞き取りにくい子供も

るといふことを考えて指導しなければいけません。記憶力に課題がある子はこういうところが苦手でなかなか話して伝えても入りにくいといふことを、学級担任が分かるだけでも随分と違います。だから、話だけでなく、大事なことを黒板に書いておくと良いです。それを見ながら話をする、子供の理解が違います。

耳で聴く方が得意なタイプと目で見て頭に入るタイプがいます。心理検査を見ると、この子は耳から入る情報が入らないのだといふことが分かると思つています。検査結果をたくさん見て、心理の専門家の方から話を聞いて、それぞれの検査項目の数値の違いから、その子が苦勞していることなどが分かる、指導のヒントになると思つています。

四 環境調整と子供たち

周囲が変われば、子供も変わります。同じ子供でも学年が上がつてクラス替えがあつて、新しいクラスに入ると、落ち着いたと思われる場合もあるし、今まで目立たなかつた課題が目立つようになる場合もあります。周囲が変わつて、その子が周りから受け入れられない状況があったり、担任の先生の子に對する接し方が変わったりと、子供は変わるものです。よい環境にいる時は課題が見えにくく、その子にとって嫌な環境や悪い環境にいると課題が出やすいです。課題が出ると

怒られることが増えるから、また課題がどんどん膨れていくというような場合が多いです。だから、通級するようになって落ち着いたといふ子がかなりいて、「もう大丈夫。これだけ落ち着いたから」と退室させたら、新しいクラスでうまくいかななくなつたといふ場合もあります。特別支援教室を利用して、通常の学級と両方の生活でちようどバランスが取れていた子が急に退室すると、なかなか難しい場合もあります。今、通級の指導年数が決められて長く指導を受けることが難しくなつている現状を聞きます。一年ぐらいで子供が抱えている課題が変わるといふことは珍しく、何年かしてその子供が変わつていく、成長していくといふ場合が多いです。今の制度は厳しいと感じています。

五 小学校時代に育てたいこと

一番は一身体を育てる、指先を育てる」といふことです。年齢が幼ければ幼いほど、動くようになりやすいです。だから、身体をコントロールする、指先を使うといふことを遊びの中でしていくことが大事です。小学生は遊びの中から学んでいく部分が多いです。遊びだと集中するのです。だから、ボール投げでも、「ボールを投げましょう」ではなくて、遊びやゲームの中で取り組むと良いです。ゲーム性をもたせて点数を付けたり、的を描いて狙つて投げられるようにしたりします。自分の身体

を思うように使えない子は、ボールを投げる強さやコントロールの調節が難しいことがあります。ボールをふわっと投げたり、強く投げたりして、力をコントロールできるというところは、指先や身体が育つてこそできることなので、遊びの中で行うのはとても大事です。その子が好きな遊びをうまく組み込んで、幼いときに粘土など指先の力で握る、絞る、はみ出さないように糊で付けるなど、指先のいろいろなことが遊びの中でできます。

小学校時代に育てたいこと

- ①身体・指先を育てる
- ②自己理解
- ③自己有用感を育てる
- ④他人と一緒に活動する経験
- ⑤相談できる人、確認できる人の理解と実践
- ⑥コミュニケーションの言葉の獲得

自己理解とは、「自分はこのタイプ」「このことは苦手でこれは難しい」「これは得意」「これに自分はすごく興味がある」ということを自分で理解することです。また、「自分が怒っていることを自分で自覚できる」ということも大事です。ある子供は、最初の頃、すぐカッと怒ってしまつてコントロールできなかつたのですが、だんだんと、「今の怒りは何パーセント」と表現できるようになりました。そうすると、今まで理解できなかった専科の先生が

「その子の気持ちの方が分かりやすくなつた。危なくなつたら教室の外へ出て、お水を飲ませたりトイレに行かせたりするようにしたら、爆発する前で止まるようになった」と言っていました。それは、本人が自分の身体でカッとした感情が分かるということなのです。そういうことを育てられると、自己理解が進み、どういうことをやったらそれを鎮められるかを理解していきます。あるいは、すぐく苛々している時にこれをしたら落ち着くということが分かれます。現状の収め方が分かっていくという子供もいます。ASDのお子さんでパニックを起こして友達に手が出る子供がいました。怒りそうになつたときに私がいつも同じ椅子のところ连接到いて、ゆっくり二十数えさせると、だんだん収まっていました。一年ぐらい経つたら、自分でその椅子のところに行

き、自分で数えて、二十数え終わる頃には落ち着いているというふうになり、「自分で自分を収められる」ようになりました。一人ずつ収め方が違うと思うのですが、どうやったら自分が収まるかを理解していくこともすごく大事です。

苦手でもどうしてもできないときは「これはこういうわけできないから、ここだけにしてください」と、お願いができることも大事です。そのような子供には、その時間に手が空いている先生のところにお遣いに出すというのをよくしていました。「はさみを二つ借りてきてください」とか、「今日何時に教室に戻るかを聞いてきてください」とか、その先生のところに行つて聞かせるのです。そうするとその先生が仕事をしていたら名前を呼んで「用事があるのです」と断つてから用事を言うとか、職員室への入り方などを実際に体験するよい機会になります。また、困つた時に誰に聞けばよいか分かるということは大切なことです。相性がよい人に聞いたり、先生に聞いたり、あるいは支援員に聞いたり、そういう確認の仕方が実践できるとよいです。確認したり相談したりできる人がいるということとで、安心して次に進むことができます。本来は小集団指導をやっている中で学べます。ソーシャルスキルのプリントを使って学習しているのを見ることがありますが、その時に正解を書けてもその子は本当に

その場で同様に言えない場合が多いです。だから、実際にこういう人になり、こういう言い方をしたら借りられるなどの実践を積んでいかないと、なかなかできないことです。私がお小集団指導でやっていたときは、意図的にそういう場をつくっていました。例えば、紙工作で、手順の○番まで終わつたら○先生のところに行つて「これでいいですか」と聞くとか、「これでいいと言われたら○先生に次の色紙をもらいます」とか、聞きに行く相手や足りなかつたときに頼む相手を決めて、その場で実践させていました。そして、はさみなどの道具を誰かが使っている時は待つていて、その人が使っている時は待つていて、その人が使っている時は待つていて、実際の場面の中で行いました。大事なものは、意図的にすることです。「ごめんなさい」と言う必要がある場面を意図的につくつて、謝れない子が謝ることができるよう経験をさせていくことができます。それが、特別支援教室だとできるような活動を企画してできます。答えを正しく書けることがソーシャルスキルを実践できることではありません。

六 特別支援教室担当としての心構え

心構え

「どのようにしたらできるか」「どのような条件だったらか」この子はできるか」と考えることが大切です。どのような条件にしたら書くの

か、書けるのか、黒板の板書は書き写せなくても、同じものが手元があれば書き写せるのか、その子ができる条件を探り、援助したり寄り添ったりすることが必要です。その子に自信をもたせたり成長させたりすることが役目なのです。だから、特別支援教室で追い込んだり叱ったりして指導していくのではなく、「自分はこれならできる、こうやればできるかも」とできるやり方を見つけて成長させるといことが、特別支援教室担当としての心構えだと思います。

特別支援教室 担任としての心構え

・指導する、直す の視点でなく

できる方法や条件を探る
援助する
寄り添う 姿勢で

自信をもたせる 成長させる

指導のポイント

＜本人なりの感じ方、
今の状態を認めるところから＞

- ・肯定的に・具体的に
 - ・視覚もあわせて
 - ・本人の気持ちを聞いたり、選択させたりする
 - ・当たり前と思えることでも、認める
- ◎事後指導でなく、事前に伝える

それから、本人なりの感じ方、考
え方など今の状態を理解し、気持ち
を説明するというのが難しい子も
います。その場合はパターンの中か
ら自分に一番びつたりするものを
選択させるということもあります。
通常の学級では、先生の言うこと
を聞くのが当たり前で、一ができた
ら一はもうできるのが当たり前、二
に進む感覚があると思います。当た
り前と思っても本人は頑張ってい
ることもあるので、当たり前だと思
えることでも認めていくことが必
要だと思えます。通常の学級の場合
は「何か悪いこととして怒られて、こ
ういうことはもうしない」と言葉で
伝え、確認していくことが多
いです。特別支援教室の場合は、先

に目標を言ってそれを守れたら「で
きた」とするし、守れなかったら、
今度どうしたらいいかを考えるとい
うことが必要です。事前に伝える、
頑張ることを具体的に伝えるとい
うことがすごく大事で、それを意識
しながら取り組むことが必要だと
思います。

七 一人一人に合った教材を

私が作った教材を紹介します。切
り抜いた写真を使いました。人の様
子や周囲の様子を理解のため、交代
で分かることを発表したり、質問し
てそのことに答えたりします。「様
子や人をよく見る」とか、「有名な人
の写真を並べて、どのくらい名前を
知っているか」とか、「どういうこと
に興味をもっているか」とかいうの
も分かると思います。本人が使える
ようなものを使って質問していく、答
えていく、また、分かったことを書
いていくこともできます。作文を書
けない子には、写真を見て、これを
そのまま文にすると、書ける場合が
多いです。写真だけで、書けない子
だったら、「お花は何色？」と聞いて
言わせる。そして、「赤い花がありま
す」と書こうと指導して、だんだん
書くことに慣れていくと、書くこと
の抵抗が取れてきます。四コマ漫画
で吹き出しを全部抜いてあるもの
で、吹き出しを別に用意しておいて、
どこに入る言葉かを考えさせたり、
バラバラにして順番を考えさせたり
後に題をつけたり、あらすじを書か

せたりすると興味をもちやすく
なる子供もいます。

子供の間違え方に気が付くとい
うのも特別支援教室の先生に必要
な視点になると思います。こういう
間違いをする子だと気が付くとい
うことは大事です。手順通りするの
が苦手な子供には手順を見ながら
紙工作をさせることもあります。工
作をすることで、手順表を見ながら
自分一人で行い組んでいく練習を
行います。

感想を書くことが難しい子供の
ためには「おもしろかった」「かなし
かった」「楽しかった」など、書き方
を示します。子供によっては感想と
は「面白かった」で終わるものだと
思っている場合もあります。ある遠
足の日、すごく暑い日で、水を最初
に飲んでなくなってしまう、のどが
カラカラで長い距離を歩いたから
辛かったということを書きました。
それなのに遠足の作文の最後に「面
白かったです」と書きました。感想
は「面白かったです」って書くもの
だと本人は思っていたのです。でも、
その時の遠足の感想だったら「喉が
渴いて辛かったです」ですよ。こ
のようにより具体的に示していく
ことはすごく大事だと思います。

ゲームに負けると大騒ぎする子
供がいました。いつも大騒ぎだった
のである男の先生がその場で「負け
るのも人生なんだよ。負けるのも人
生」とつぶやいたのです。そうし
たらその子にその言葉が入ったら

く、次負けた時にその先生のそばで、「負けるのも人生ですか」と聞いて、先生も「負けるのも人生」と言ったら、それからは負ける度に「負けるのも人生。負けるのも人生」とおまじないのように唱えるようになり、勝たなくても済むようになったということがあります。

八 おわりに

私自身も教員として、保護者の方や周りの先生に様々なことをしてもらい、育ってきました。小集団の活動の中で、上手な声のかけ方の先生のやり方を見て、「こういう風に声をかければいいんだ」「始めにこれを言っておくべきだった」と段々覚えながらやっていると、成長してきました。特別支援教室は、その子用にプログラムを組めるという面白さがあり、その教材が合った時に保護者に感謝されたり、学級担任の先生から「特別支援教室に行つてから変わりましたよ」と言ってもらったりすると、すごくやりがいがあります。その子の指導は、特別支援教室のその担当の先生しかできない仕事なので、「その子用のプログラム、その子用の教材」で、ぜひリラックスさせ、自信をもたせ、将来少しでもその子がやりやすく、自分のこれと思う仕事に取り組めるように手助けをしていただければと思います。

第五十五回

全国情緒障害教育研究協議会
埼玉大会のお知らせ

令和五年度第五十五回全国情緒障害教育研究協議会は、埼玉大会です。今回は、第五十二回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 埼玉大会と合同開催いたします。

【期日】令和五年七月二十七日
(木)・二十八日(金)

【参加方法】①会場参加：ソニックシティ ②オンデマンド動画配信視聴参加

【大会主題】「彩(いろどり)〜豊かな学びと共生社会の実現を目指して〜」

【副題】難言「ことばを育て、こころを育み、自己肯定感を高めるために、今できること」
情緒「つながる、つなげる、社会の中で自己有用感を高めるために、今できること」

【参加費用】

Aコース(対面参加)五〇〇〇円
Bコース(オンデマンド参加)四〇〇〇円

※配信期間は七月三十一日〜八月三十一日

【申込方法】ウェブ

【大会ホームページ】

埼玉県特別支援教育研究会HP内



【最後に】

参加方法が二通りあるため、遠方からの参加も気軽にできます。
(全情研事務局長 植草葉月)

第八回都情研夏季研究大会

(南ブロック大会)

日時：令和五年八月三日(木)
九時四五分〜十六時二五分

会場：大田区民ホール・アプリコ
大ホール
(JR・東急蒲田駅
下車徒歩三分)

内容：指導実践発表

パネルディスカッション

講師：長谷川 安佐子 先生
(前新宿区特別支援相談員)

※大会テーマ

「小集団指導における自立活動について考える」特別支援教室や自閉症・情緒障害学級で何をすべきか」

今年度の夏季研究大会は、大田

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら、左記までお寄せください。

編集・発行

企画運営本部広報担当

葛飾区立川端小学校 坂本夕子
☎03(3692)8135